

おんなのひろ場

随筆

砂わらの思いで

坂井 園作

すなわらが無くなってから十年以上も立ってしまいました。大野唯一のすなわらでした。すなわらと言っていました私の子供の時代のすなわらの思いは大野橋から(当時はつり橋でした)橋の所より蒸気場小路迄周囲五百米はあったでしょうか。すなわらは種々に変わりました。すなわらの時代島になった時代物捨て場になった時代、交通公園になった時代と幾度と変りかきなりとうとう今は川の底になり堤防になり昔の面影は全くありません。

と上げたイカが上空にからんでからんだまま、町中に入りケンカイカになり家根石がとんだ話を聞かされました。私の子供の時代も節句にイカを上げました。六角イカの大きいイカです。新田町は朝日に鶴の園の大イカでした。新地五区も大きいイカを上げました。因は分りません。

昔は川水はうまかった。家庭用の水のみならず川から桶で汲んで水がめに入ります。又川が大水になると水の引くのをまつて砂わらに穴をほってこし水に下から出ます。それを飲み水に使います。又大水後には流木が砂わらへ上り水が引くとその流木をひろって燃料(ガス木と言っていました)にします。昔はガスも水道もない時代唯一の薪でした。又面白い形の物もありました。今でも大切にしております。又砂わらは蒸気船が着きました。白根丸と安進丸です。夏になると裸の子供達が蒸気船上り船の人に怒られると川へ飛びこみます。又川には粘土がビッシリありスベリ台になります。川へスベリこむのです。皆が黒になりました。蒸気船が発着したのは今の風間新聞店の小路です。蒸気場小路といっていました。その川端が蒸気船の発着した所です。其の後何十年かたって交通公園となりしばらく利用されたのでなくなりました。中之口川は北へ流れるばかり沿岸に棲む住民にとって寂しい限りです。

たのが、今はもう薄緑の若芽を先端に息吹き、五月の光と風を一杯受けて、灰色の空高く緩やかにしなやかに、小刻みに揺れているのである。目に青葉、山ほととぎす初鰯と、五月の象徴にもあるように、五月の若葉は、目にやさしいのである。そして鰯の獲れるシーズンでもある。昔お茶の先生が、春の庭を見ながら、「山の春はこぶしから始まるのです」と教えてくださった言葉が、ふと懐かしく思い返す。ここから見ていると大木の木々は、春夏秋冬と、自然と共にその生き様を変えながら、その度何かを、私に気付かせてくれているのである。

我々人間も、自分に厳しい人が、必ず一人はいると云われているのである。その人が磨き粉となり、人間が完成される一原因となると云う訳である。有難い話なのである。四世なお釈迦様は、いつも自分を裏切ったり落とし入れようとす敵のだいたいを、愛おしいと思つたと云われているのである。まさしく罪を憎んで人を憎まずという訳である。お釈迦様はインドの、王家の子孫であった。妻や子もいたのである。何がどうして地位や名譽をお捨てになられたか、定かでないが、全てを捨てて出家されたのである。お釈迦様は偉大なお人である。

新田町と新地のイカ合戦をやるのです。新田町は船頭衆が多勢いでしたからいせいがいい、新地(五区の人)も農家がありましたから気が揃って伊勢がい、新田町と新地のイカ合戦が有りました。イカのからみ合いからケンカイカになるのです。大きいイカでした。立てると六角尺はあったでしょう。

浴岸の裏町風景や川端等三十枚位水彩画に書きました。木々にちなんでエトセトラ

柳に雪折れなしと云うように、木々は、自然に逆らわずいつも、素直に自分の役目を堂々とまっとうしているように思っているのである。木々のような素直さは、老いも若きも全ての人の必要である、素直になれば謙虚になり、反省し感謝する事ができるからである。あそここの栗の木も又秋になったら、いがいがの実を沢山つけるのであろう。そんな近い将来の想像も又楽しいものである。

綺麗な月も雲が出れば台無しである。綺麗な花も風が吹けば散り急いでしまふのである。人間一人びとりでも、自分に逆らう苦手な人が必ずいるのである。嫌がつてはいけないと思うのである。それも家族の中の人の場合も多いのである。その為に少しでも、衿を正して緊張して生活出来るのである。時にはわがままを退治してくれる、怖い人も必要であると云う訳である。

すなわらは夏になると熱くてゾウリをぬらしてはきました。夏になると川にイサザが上つてきます。▽三角のわくにかやの布を張つて作ります。イサザが川を上つて来るのをとります。体長一センチ位の小さな魚です。

アフリカの内戦悲し写真にて右腕のなき幼女の写る 永田 キヨエ

一郷の田のはればれと打たれあり 講師

初蝶の淡き影さす水面かな 排佐子

私は死ぬ時が、一人前になれる時だと思つているので、色々な体験を通し、色々な人々からクリーニングされながら反省し、又学び少しでも多く汚れを落とし、寿命がきたら霊界へ誕生していきけるようにといつも望んでいるのである。

雪消えし岸の枯葎動めくは男一人が魚釣るらし 阿部 淨子

お彼岸に寺の法話を聴きながら我が心にも春がうごめく 大谷 モト

よき出合ひ名残りの別れ弥生尽 智恵子

春の雪凌ひし泥に吸はれけり 義男

短歌

黒埼短歌会

「ありのまま」に生きゆくことが幸せと今日の法話に僧は語りぬ

夕ぐれのこの川べりを散歩せしとき師の姿目に浮かび来ぬ 阿部 テイ

死を思い門付したる日もありと人間国宝歳の替女 笠原 セツ

岩枝に勢ひそなはり初櫻 秀子

掌のひらに受けし紫陽花類によせ 鹿嶋 十一

泉井 ヨ子

小出 美喜子

笠原 セツ

秀子

鹿嶋 十一

食

健康まつり
好評メニュー

一食生活改善推進委員会

ハンバーグのトマト煮



材料 (6人分)

牛挽き肉	450 g
玉ねぎ	1 個
油	大さじ 1
卵	1 個
パン粉	1/2 カップ
塩	小さじ 1
こしょう	少々
ナツメグ (あれば)	小 1/2
きぬぎや	40 g
グリーンピース (缶)	80 g
しめじ	1 パック
油	大さじ 1
ホールトマト (缶)	400 g
塩	小さじ 1
こしょう	少々
チキンスープの素	1 個
ローリエ	1 枚
生クリーム	1/2 カップ

作り方

- 玉ねぎはみじん切りにする。フライパンに油を入れて中火で熱し、玉ねぎを炒め、しんなりしたらパットにあげて、さます。
- しめじは石つきをとり、小房に分ける。トマトは缶汁ごとボールにあげて、手でつぶす。
- ハンバーグのたねを粘りがでるまで、よく練る。手のひらに油少々を塗り、小判型に形を整え、中心を少々くぼませる。
- フライパンに油を入れて中火で熱し、たねを焼く。ペーパータオルでたまった油を拭きとり、トマト、塩、こしょう、くずしたスープの素、ローリエを加え、ときどき混ぜながら約10分煮て、器に盛り、生クリームを回しかける。
- フライパンをペーパータオルで拭き、油を入れ強火で熱し、きぬぎや、グリーンピース、しめじを入れてさつと炒め、塩、こしょうで調味し、ハンバーグに添える。

俳句

黒埼俳句会

風が触れ日が触れ櫻ほころびぬ みどり

春の雪凌ひし泥に吸はれけり 文雄

がうがうと風の林の辛夷かな 義男

花冷えのたとえば変る湖の青 律子

語りかけるごとく濡らして木の芽 一翠

逃水や史跡めぐりの小旅行 悦女

木蓮に朝の障子を開けておく けんじ

掌のひらに受けし紫陽花類によせ 鹿嶋 十一